山本健慈　学長　新春インタビュー

和大新聞

2011年
1・2月合併号
＜発　行＞
和歌山大学
新　聞　会
〒640-8510
和歌山市
栄谷930
和歌山大学
第1ｻｰｸﾙ棟

――先ず、今年度を振り返って一番重要なこと、印象に残ったことをお聞かせください。

偶然、本年3月の卒業式の日にでしたが、文部科学省から2007年3月段階での国立大学法人評価が発表されました。本校の点数は86大学のうち可成り下位の方にランクされました。当然私達は非常にショックを受けました。学長に就任し新しい執行部が発足する中でどうしてこのような評価になったのかと戸惑いすら感じました。勿論本校学生をはじめ、卒業生の方々も同様にショックを受けたとお聞きしています。それで、その詳細を調べてみると和歌山大学の教育研究実績の価値が十分伝えられていなかったということでした。また、このような新しい評価方法に対して手続きをはじめ対応方法が本校として確立していなっかったということで、この点は深く反省しました。

5月に学生11団体との話し合い会議で学生諸君から「我々の大学は素晴らしい内容を持った大学であり、この評価には疑問があると思う。我々学生も世間に和歌山大学の活動成果を発信するが、大学当局も自信を持って発信して欲しい」と励まされました。私も学長になって未だ半年くらいでしたが、計画していた色んな活動を実施しました。例えば、夏に学生諸君のプレゼンテーションもいれた和歌山大学研究集会を実施しました。また、定例の教育研究評議会に学生によるプレゼンテーションの時間も設けて、課外を含めた活動や研究業績等についての学生の活動を大学の幹部教職員が知る機会としました。また素晴らしい研究業績、

成果であるが、当事者にしか知られていないことについてもこの評議会に報告することとして、その成果を広く世間に発信することとしました。ランキング騒動というマイナスのことから1年がはじまったが、それが却って大学がおかれている現状と社会への貢献度ということを見直すことにもなり、学生も含め、和歌山大学全体が経営という意識を持ったということになり非常に良かったと思っています。

――田辺市に設置している南紀熊野サテライトもその一環ですね。

そうです。今年の4月から常駐のコーディネーターを2人配置しました。その結果大学に対するいろいろなニーズなどを発掘するとともに現地での実証的研究を通して地域と大学が密接な関係になりました。また、地域産業と大学の研究をどう結びつけるかということで4月から和歌山県庁の職員と大学の職員の交流を始めました。互いの職員が密接なコンタクトを持つことにより情報交換がスムーズになり、地元企業の方々がシステム工学部の研究室にご相談等に来られるなど、情報交換が密になって地域との関係が新しく発展する土台ができたのではないかと感じています。

――最近の活動成果について今少し紹介をお願いします。

研究成果のPRについては、本校の業績について最近報道機関でとりあげられてきました。その一つは尾久土先生のところで“はやぶさの帰還”の撮影をして非常に世界に知られました。また宮西先生の“ひきこもりからの脱出を支援するプログラム”は日本中で最も優れたプログラムの一つであると広く知られ、高い評価を受けています。

――（2面に続く）

各団体からの取材依頼募集!!

紙面より

国際教育研究センターインタビュー・4面
おもしろ科学まつり・・・・・・・7面
定期演奏会特集・・・・・・・・・12面

（1面の続き）

これ以外にも学術論文発表など色々ありますが、このように研究成果が確認できてきたということです。それから、このようなことを組織として強くするにはどうすれば良いかということで色々取り組んできました。その一つは学生団体との交流と意見交換を随分重ねてきたということです。それから和歌山大を一致協力して発展させるために教員と職員の教職員合同合宿を実行しました。また、8月の研究集会では和歌山大学の課題を自分たちで考え、その推進のプログラムを創出し、そのために必要な社会条件の整備について社会的に発信する、そういう自分たちのための組織の強化と発展を目指した取り組みをスタートさせました。色々難しいこともありますがこの一年着実なスタートをきったかと考えています。

――話題は変わりますが、学長先生の学生時代についてお願いします。

私の大学時代は1970年前後で、大学紛争が盛んだった頃です。紛争の事柄は例えば大勢の学生を詰め込んだ大授業で，所謂マスプロ教育に対する怒りでした。それで先生と学生の随分激しい議論がありました。それから、学外では、当時ベトナム戦争もあり、国内には公害問題もあって、それらの問題に我々学生がどのようにして取り組んでいくのかという議論が随分あった時代でした。社会の現状をより良くしたいという気持ちがものすごく働いて、社会運動や学生運動が広がっていた時代だったと思います。今、皆さんが直面している問題も、就職問題とか、経済問題とか、授業料など学費の問題とか困難な問題が沢山あります。現在、日本は本当に難しい問題がたくさん起こっています。私は皆さんにそれらの問題に強い関心を持って、その問題の本質を学んで、積極的に取り組んでいくようになってほしいと思います。

――次に、就職活動をしている学生にメッセージをお願いします。

今日の就職困難の状況は我々の学生時代には想像できないことですね。だから我々の世代には見当はずれの安易なコメントをすることもあるかと気にしています。ただ、私は就活をしている学生に、自分は何をしたいのか、何が向いているのか、自分の人生の志とか、自分はどういう事をすることが幸せかということ、そのことについて、苦しいからなかなか考える余裕がないかもしれないが、それでもこのような苦しい時代だからこそ考えてほしいと望んでいます。昨今は大企業でも不安定な時代です。くどいことかもしれませんが、自分が本当に好きなこと、自分の幸せに結びついた職業に就いて欲しいと願っています。私達もそういうことを一緒に考えるような就職支援体制の充実を計っていきたいと考えています。

――平成23年に向けての抱負をお聞かせください。

1番目は教養の改革をする。特に、海外に行くプログラムを作ることです。それから2番目は図書館を改革しようと思っています。学生の学習、先生方の論文・資料の検索に対応できる専門の職員の設置をしたいとか、図書館は大きなハードですから、そこを中心に学生も満足できるような空間とサービスをつくりたいと思っています。3番目は農と林、環境を軸にしたネットワークの構築です。和歌山県は農業と林業が非常に大きな財産です。日本の中でこれ程豊かな農と林を持っているところはありません。和歌山大学はその基盤の上にある大学であるということを考えれば、和歌山大学には農、林を研究する組織がないけれど、学部を超えた農、林、環境を軸とした研究ネットワークを学内に構築し、県下の官庁、団体、企業とも連携して和歌山という地域の持続的発展に寄与する必要があると考えて、いますが4番目として和歌山大学は和歌山県および近隣の諸県の高校生の進学目標の大学です。したがって和歌山大学が中高生の憧れとなるような大学としたいと思っています。だいたい以上が中心ですが、学生諸君の協力をお願いします。

――本日はお忙しいなか、貴重なお話、本当にありがとうございました。

【聞き手・川崎競平】
【写真・高橋弘樹】